



# 東 京 日 々 新 聞



武州秩父郡薄村の農者其睦は、暮一存し妻の病死

せし哀しと歎きて引籠りての存せしよ

或る夜の事ある山寺の鐘の幽なるあり

枕を拾けて傍に見れば亡妻の面影朦朧と見え

なりマレ多のじやと云ふと世間は形なき道にて失せ

けさぬぬれ魂の迷ひ来り考ふんと明日の苦境取り

参り香花と手向けに帰らるる其夜も又刃の頂自らりて

見よ白き衣と身を纏ひて枕元は暁と居る言葉

掛何事ゆゑに迷ひ

来しと尋ねば

妻の平生秘蔵

世首飾や小袖

が惜しくお前の事

も涙はらと衣籠より引

きよと其涙の音もるるれ

は何かいひなく悲し

堪へぬに故の惜しと云

品ごと枕元は左置と籍

しよ翌朝とさる品物のもえたる

何か言ひて左と執念のよきつらと

仕事と親しき若しは、さる彼の若師と

や思ひなん吾も怒意の中を念ひの一遍り唱へ

現れて此度へ金借しと云ふに御彼の人よりと加起引捕へ

たれに隣家の女房と幽冥子打扱

りて

福 眞足屋 度影栄

萬齋 芳樂

